

---

# 艦魂年代史外伝 いつかまた平和な世界で会おうね

黒鉄大和

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

艦魂年代史外伝 いつかまた平和な世界で会おうね

### 【Nコード】

N0241D

### 【作者名】

黒鉄大和

### 【あらすじ】

太平洋戦争後期、日本海軍は幾多の戦いの中で失った空母を補充する為に次々と空母の建造に着手した。雲龍型空母や空母「信濃」、航空戦艦「伊勢」「日向」も建造された。だが、戦況が悪化するにつれて建造する為の資材や人員が不足し、そのほとんどが建造途中で建造が中止された。空母「伊吹」もその一隻だ。建造が中止された「伊吹」の上で、少年と少女は別れの時を向かえ、ある約束をした。必ず、再会すると・・・

(前書き)

艦魂年代史外伝シリーズ第十一弾は未完成空母『伊吹』の話です。前回到引き続き完成度の高い作品(自己判断)です。

しかも、今回の作品僕自身はそんなに乗り気ではありませんでしたが、書いているうちに自分でも感動してちよっとうるっとしてしまった作品でもあります(ただ単に僕の涙腺が弱いのですが)。

外伝シリーズ初の特攻話も加わり、戦争の悲惨さがより鮮明に描かれています。

もしかするとこれ以上の作品はもうないかもしれない。そんな作者一押しの作品、気に入ってくれたら嬉しいです。

一九四五年三月十六日、佐世保海軍工廠で一隻の空母の建造が中止された。

全長二〇五m、全幅二一・二m、機関出力七万二〇〇〇馬力、基準排水量一万二五〇〇トン、最高速度二九ノットという日本海軍最後の新鋭改装空母 軽空母『伊吹』。

工事工程八割まで完成していたのに、時間、資材、人員の不足ともはや日本での空母の時代は終わりを告げていた為、『伊吹』は建造を中止された。

毎日主力攻撃となった特攻機が空を飛び交う下で、『伊吹』はその姿を天に晒していた。

二基の飛行機エレベーターは完成せずただの穴でしかなく、空母の頭脳である艦橋もまだ建てられていないが、形は空母のそれだった。

あと少し建造を続ければ完成というのに、『伊吹』にはそれはない。

結局、軽空母『伊吹』は太平洋の海を一度も翔ける事なく、ただ解体されるのを待つだけとなった。

そして、編成されていた伊吹航空隊も・・・

つい先日まで忙しく動き回っていた艦装員は今ももう一人もいない。きつと他の艦艇の建造、修理に派遣されたのだろう。

途中で投げ出された『伊吹』の甲板は大量の部品や巨大なエレベーターの床部分が置かれ、甲板は雑然としていた。

そんな『伊吹』の艦首にはポニーテールを流した一人の少女が座って天を翔ける特攻機を見詰めていた。その手にはギュツと握り締められた旭日旗。一度としてそのマストに掲げられる事なかった軍艦旗が風に揺れている。

少女は悲しげな瞳で天空を翔けて行く特攻隊を見詰める。そんな彼女に一人の少年が歩み寄った。

「伊吹・・・」

伊吹と呼ばれた少女は少年の方を向く。その瞳は先程よりも悲しげに揺れていた。

「三月も、いなくなっちゃうの？」

少女 伊吹はガラス玉のように輝く瞳から一筋の雫を流す。

三月と呼ばれた少年は一瞬躊躇するもしっかりとした口調で答える。

「僕は明日、鹿屋基地に派遣される 伊吹とは、今日でお別れだ」

「・・・そっか・・・そう、だよな」

伊吹は小さく笑みを浮かべたが、それは悲しげな笑顔だった。

「鹿屋基地は沖縄海域に集まる敵艦隊に対する特攻攻撃の主力基地ですけど・・・三月は特攻機に乗ったりしないよね？」

「それはわからない。優秀な戦闘機乗りならともかく、僕は戦闘機乗りでも新米で特に秀でた才能もない 特攻兵には持って来いの人材だよ」

三月の言葉に伊吹の表情が変わる。顔は一瞬で蒼白になり手を小さく震わせている。

「そんな・・・っ！ 三月もあの特攻機みたいに敵艦に突っ込むの！？」

伊吹は立ち上がって空の向こうへと消えて行く特攻機を指差す。

そんな彼女の姿を見て、三月は何も答えられなかった。

「・・・そんなの・・・絶対にダメッ！ 三月には生きてほしいの！ お願いだから、生きてよおっ！」

「そりゃあ、僕だって死ぬのは嫌だし、怖いさ。でも僕みたいなひよっ子搭乗員に何ができる？ 命令を受ければ、僕は特攻をする」

三月の強い覚悟に、伊吹は「バカッ！」と叫んで背を向ける。その小さな肩は小刻みに震え、口からは嗚咽が漏れていた。

自分なんかの為に涙する伊吹を三月は抱き締めたかったが、それ

はやめた。これ以上彼女に関わるのは、彼女の為にも良くはない。

三月は静かに彼女に背を向ける。

「伊吹。さよなら」

三月はそう言い残し、歩き出す。が、突如後ろから何かに抱きつかれた。

「伊吹・・・？」

「行かないで。お願い。ここにいてよ。私には、あなたしかいないんだからあつ！」

「伊吹・・・」

「出撃は、明日でしょ？ なら、それまでここにいて。お願いっ！」  
涙をボロボロと流しながら言う伊吹に、三月は静かにうなずいた。  
これ以上彼女に関わるのは彼女の為にも良くはない。でも、こんなに涙を流して頼んでいる彼女を見捨てられるほど、三月は強くはなかった。

ゆっくりと二人して甲板に腰掛ける。  
天を見上げると、もう特攻機の姿はなく、あるのは蒼い空だけだった。

「君と出会ってもう三ヶ月になるけど、結局君の甲板から飛び立つ事は一度もなかったね」

「ごめんなさい」

「伊吹が謝る事はないさ。戦局の悪化だもの。仕方がないよ」

「でも・・・」

「初めて会った時も、こんなふうに悲しげな瞳をしてたな」

「・・・だつて、私は元々重巡洋艦として造られてたんだもの。主砲装備も終わって、もう少して完成して海を翔けて敵艦を粉砕できたのに、そんな時に空母への改装だもの。暗くもなるよ・・・もし、あのまま重巡として竣工しれいれば、捷一号作戦（レイテ沖開戦）には間に合ったのに・・・」

「仕方ないよ。時代は航空機の時代なんだからさ。それに、もし空母に改造されていなかったら、僕達は出会う事はなかったんだよ

？」

「それは、そうだけど。でも・・・」

落ち込む伊吹の頭を、三月はそっと撫でる。

「君のせいじゃない。君だって、戦争の被害者なんだから」

「三月だってそうでしょ？」

「まあね。父さんは中国で戦死。兄さんはレイテで戦死した。そして母さんも、一週間前の東京の大空襲で死んだ・・・僕にはもう家族は残ってない」

悲しげに言う三月を、伊吹は静かに見詰める。だが、その表情はすぐに優しい笑顔に変わった。

「でも、僕は大丈夫。僕には、大切な、守るべきものがあるんだから」

「え？ 一体何？」

伊吹が首を傾げると、三月はそっと笑顔を伊吹に向ける。

「何って、伊吹。君だよ」

「わ、私!？」

顔を赤らめて驚く伊吹に三月はうなずく。

「ほ、本当に？」

「うそ言ってどうするんだよ。本当さ」

三月の笑みに伊吹は笑顔を浮かべたが、すぐにそれは曇る。

「でも、そのせいで三月が死ぬのは嫌だ」

「・・・伊吹」

「約束して。必ず生きて帰って来るって。約束して」

伊吹は必死に三月に頼んだが、三月は首を横に振った。

「それは、約束できないよ。約束しても、変えられない事はあるんだから」

伊吹は悲しげに顔をしかめると、顔をうつむかせた。

「約束くらい、してもいいでしょ・・・？」

「伊吹・・・」

「お願い、だから、約束してよ・・・っ」

伊吹は三月の袖を掴んで離さない。

つぶらな瞳を必死に向け、伊吹は訴える。そんな伊吹の必死な姿を見て、三月は小さくうなずいた。

「わかった、約束する。守れないかもしれないけど、守るように努力はするよ」

三月の言葉に、伊吹は小さく笑みを浮かべた。

「ありがとう。その言葉で、私はあなたを見守ってられる」

「ありがとう」

伊吹は三月の顔をのぞき込むように三月を見詰める。その彼女の行為に三月も気づき、そっと顔を近づける。

そして、二人の唇がそっと触れ合った。

互いに柔らかく温かい感触を感じ会うと、そっと離れた。

顔をほんのりと赤らめ、青空の下、二人はいつまでも笑みを浮かべ続けていた。

艦の魂の化身である艦魂の伊吹は自分やまわりの艦から離れる事はできない。

彼の傍にいる事は、できなかった・・・

翌日、三月こと椎名三月上等飛行兵は鹿児島県にある鹿屋基地に向かった。

鹿屋基地は連日のように特攻機を出撃させる沖縄海域に集結している敵艦隊に対する特攻作戦の最前線。そこに送られるのは、死を意味していた。

派遣された三月は戦闘機乗りとしてそれなりに優秀だった。その為特攻機の護衛任務を数多く受け、敵艦隊付近まで護衛した。

愛機である零戦から離れていく特攻機隊の搭乗員は自分達護衛隊に向かつて敬礼をすると、一斉に急降下をして離れていく。そんな彼らを見詰め、三月は静かに敬礼すると反転帰投。

もしかすると、自分もいつか彼らと同じように・・・  
そう考える頭をブンブンと振って否定する。

「約束したんだ。伊吹と、必ず生きて帰るって……」  
そう自分に言い聞かせ、操縦桿を強く握った。

基地に戻ると、特攻隊の戦果が入っていた。

敵艦十数隻に突入。うち三隻に甚大な被害を与えた、と。

司令部の人間は大喜びだったが、三月の表情は曇ったままだった。いくら戦果が出ても、それが特攻の結果なら、少しも嬉しくはない。むしろさつきまで一緒に飛んでいた彼らが今はもういないと思う方がよっぽど辛かった。

三月はそのまま自分の部屋に戻ってベッドに倒れた。

この惨い戦争はいつになったら終わるのだろうか。

このまま戦い続ければ日本に未来はない。破滅への道をただ転がり続けるだけ。そんな事をすれば日本という国はなくなる。

上層部は沖縄で持久戦に持ち込み、本土決戦に備えるらしい。本土決戦になれば、日本国民一億人が全滅するかもしれない。

それに……本土決戦までいかなかったとも、このまま敵機が日本本土上空を飛び爆撃をすれば、もしもそれが佐世保を襲い、今も空を見上げているかもしれぬ彼女に襲い掛かる事だけは絶対にあってはならない事だ。

そんな事を考えていると、部屋がノックされて誰かが入って来た。

「お疲れ、椎名」

そう言っただけ来たのは自分の上官である武藤隊長だった。

「隊長。どうしたんですか？」

「うん？ いや何。ちよいと不報を聞いたんでな」

「不報？」

「俺達の後に飛び立った桜花攻撃隊だが、敵艦隊に到達する前に敵戦闘機の猛攻撃に遭って、全滅したそうだ」

「全滅ですかっ!？」

三月は驚愕した。

桜花攻撃隊とはロケット特攻機『桜花』。通称人間爆弾と呼ばれ

る兵器を積んだ特攻部隊で、一式陸上攻撃機の下に吊るされ、護衛戦闘機と共に敵艦隊に近づき桜花を放つ。桜花はそのままロケットエンジンを点火させて搭乗員もろとも敵艦に体当たりする兵器だ。駆逐艦程度の敵艦なら一撃で葬り去れる。だが、その最大の弱点は桜花は一度発射したら音速を超えるので撃墜不可能だが、発射前の母機群は桜花を積んで足が鈍い。そこを撃墜されれば壊滅する。どうやらその攻撃隊もそれを受けて全滅したらしい。

「全滅って・・・本当に全滅ですか!？」

「いや、全滅したのは一式陸攻部隊だ。一応戦闘機隊は戻って来た。だがその戦闘機隊も四〇機出撃したうち帰って来たのはわずかに十二機だそうだ」

「そんな・・・っ!」

今の戦闘機隊は雛鳥と称されるほど搭乗員が未熟なのだ。敵から見れば簡単に撃ち落せる程度の敵。だからといって戦闘機が半分以下にまで減るなんて、日本航空隊も落ちる所まで落ちてしまったらしい。

「他にも俺達は敵戦艦部隊への特攻機護衛だったが、一番危険な敵空母部隊に向かった特攻隊も突入する前にほとんど撃ち落され、生き残った奴も敵の対空砲火で全滅。一機も敵艦には体当たりできなかったそうだ」

「特攻でも・・・もう敵艦は撃沈できないんですか?」

「そうかもしれない。だが、今の日本はこれしか道がないんだ」

武藤の言葉に、三月はうつむいた。

特攻という命懸けの攻撃をしても、敵艦は撃沈できない。なら、どうやったら敵艦を撃沈できるというだろうか?

落ち込む三月の肩を、武藤はそっと叩く。

「まあ、俺達は命令されたままに動くだけさ。そういう難しい事は司令部のお偉いさんが決める事だ」

武藤の言葉は楽観的なものだったが、その声のどこにも余裕はなく、真剣そのものだった。

武藤が去ると、三月は窓の外を見詰めた。

「伊吹……」

もう会えぬかもしれない愛する者の名を呼ぶが、それに答える声があるはずもなく、三月はベッドに倒れた。

今日は少し疲れた。

三月はゆっくりとまぶたを閉じて眠り始めた。

ついに米軍は沖縄に上陸を開始した。それに対し日本軍は陸海軍合同の大規模な航空機特攻作戦の発動を決定した。

菊水作戦の発動だった。

そして、特攻作戦の前線基地である鹿屋基地も多くの特攻機を出す事になり、三月の戦闘機隊からも特攻隊員が出される事になった。上官が次々に黒板に白いチョークで名前を書いていくのを三月は恐怖を感じながら見詰めていた。

そして、その予感当たってしまった。

突如頭が真っ白になり、愕然と黒板を見詰めた。その先には黒い黒板の中央に白い文字で 椎名三月上等飛行兵、と。

驚愕の後に来たのは恐怖。

うそだと思いたかったが、目の前の文字は変わらず自分の名は消える事はなかった。

愕然としている三月の肩を誰かがポンと叩いた。振り向くと、そこには真剣な顔をした武藤がいた。

「お前も選ばれたか」

「お前もって、まさか」

慌てて黒板を確認すると、自分より後の方に武藤の名もあった。

「俺だけじゃない。杉田や秋山、井上もだ」

「……そうですか」

もはや何も考えられない三月の肩を武藤は叩くと、部屋から出て行った。

三月の他にも愕然としている者がいる。それは皆黒板に名を書か

れた特攻隊員だった。

部屋には不気味な沈黙が流れ、誰もが呆然と黒板を見詰め続けた。

その夜、特攻隊員は宴会が開かれた。

隊員達は今までにない豪勢な食事を食べ、酒を浴びるようにして飲みまくった。それが出撃するまでの特攻隊員の生活だった。

「飲め飲めっ！ 後で悔やんでも遅いぞ！」

武藤は部下に酒をどんどん飲ませる。そんな彼らの横で、三月も日本酒を一本空けていた。

「おい椎名。さすがに飲みすぎだぞ」

横にいた同期の秋山上等飛行兵が三月が手に取った酒瓶を取り上げる。

「うにゃー、僕のおしゃげがあ・・・」

「おい椎名。お前目がグルグルマークになってるぞ。大丈夫か？」

「えへへー、椎名上等飛行兵、大丈夫でありますう」

「隊長お！ 椎名が壊れましたあっ！」

結局椎名は武藤の肩を借りて部屋に戻る事になった。

部屋に戻る途中、ふらふらになった椎名の肩を武藤は押さえながら歩いていった。

「おい三月」

「ふへ？」

「もう芝居はよせ。お前酔っ払ってなんかないだろ？」

「さすが隊長。丸わかりですか」

三月は一変して武藤から離れてしっかりと足取りで歩き出した。

「お前酒は飲んだのか？」

「はい。酒瓶一本ほど」

「なのに酔わないのか？」

「昔からお酒には強い方でしたので。それに 死ぬってわかってるのに、酔えませんかよ」

「そっか、俺もだよ。いくら飲んでも酔えん。たぶん他の奴らもみんな同じだ。みんな無理やり笑ってるんだ」

「そうですか・・・」

武藤の後ろを三月が続き、通路の角を曲がった時、武藤が振り返って来た。

「それよりも椎名。お前は遺書は書かないのか？」

「遺書、ですか？」

「そうだ。お前以外みんな書き終えてるぞ」

「・・・書いたって意味ないじゃないですか。送る相手もいないですし、送るとしても検閲で引つかかるような内容は書けませんですし」

「・・・まあ、そうだな」

その後二人は沈黙したまま歩き続け、三月の部屋の前に着いた。

二人は無言で別れ、三月は部屋に入った。

暗い部屋の中、三月は一直線に机に向かった。

椅子に座り胸の内ポケットから一枚の紙を取り出した。それは武藤には書いていないとは言ったが、遺書だった。

絶対に検閲に引つかかるような内容だった為公にはしていない。

それに送る相手は 伊吹だった。

「伊吹。僕は特攻隊員に選ばちゃったよ・・・ごめん・・・約束、守れなくなっちゃったよ」

伊吹の笑顔を思い出し、三月は涙した。

月明かりに照らされる薄暗い部屋の中で、三月は悔しそうに遺書を握り締めた。その瞳に映るのは、一人の大切な少女の姿だった。

四月六日、ついに攻撃の時が来た。

飛行場にはすでに百機近い特攻機が整然と並べられていた。

特攻隊員達は第五航空艦隊司令長官である宇垣纏中将の言葉を受けた後自分達の特攻機に向かった。

三月は武藤と別れると出撃前に仲間からもらった牡丹餅を頬張り

ながら自分の愛機である零式艦上戦闘機五二型の前に立った。

日の光を浴びて輝く零戦の下部には燃料増槽ではなく普通戦闘機にはない二五〇キロ爆弾が搭載されていた。それが特攻機の証だ。

これが自分の棺桶になる機体とは彼は考えなかった。今まで共に数は少なくとも敵機を撃ち落した戦友だ。だから、共に死地へ向かう相棒だと思え、小さく笑みが浮かんだ。

「椎名上等飛行兵！」

突然声を掛けて来たのはいつも愛機を整備してくれていた青年

横山整備兵だった。

「今までお世話になりました」

三月は彼に頭を下げて今まで世話になった事への感謝を言った。

横山は何も言わずそっと三月の肩を叩いた。顔を上げると、そこには優しい笑みを浮かべた彼がいた。

「燃料は満タンにしておいた。本当は片道分だそうだが、俺からの出撃祝いだと思ってくれ。もし、機体に何かトラブルが起きたら、戻って来い。いいな？」

彼の心遣いが三月の胸を打った。

本当に最後の最後まで世話になったのだ。

三月はそんな彼に「ありがとうございます」と礼を言つと、ちょっぴり笑みを浮かべる。

「でも、横山さんのモットーは絶対に不都合が起きないように完璧に整備する、じゃありませんでしたか？」

「うぐつ、そいつは・・・」

言葉に困る横山を三月は優しい笑みを浮かべた。そんな彼を見て、横山も笑みを浮かべた。

これが死地へ向かう者と見送る者の最後の会話なのだろうか？

二人は同じ事を一瞬考えたが、やめた。

今ここに彼がいるだけで、それで十分なのだ。そう思ったから。横山が離れ、三月は零戦に乗り込んだ。すると、そこには一枚の手紙が置いてあった。そこには『整備兵一同貴官ノ健闘ヲ祈ル』と

書いてあった。たぶん出撃全機に置いたあるのだろう。三月は笑みを浮かべてその手紙を胸ポケットに入れた。

日の丸に《神風》と書かれた鉢巻を頭に締め、ゴーグルを掛けた。いつもと変わらない出撃だが、頭には神風の鉢巻があり、これが特攻出撃である事を示していた。

そして、時間が来た

センターポールに日章旗、旭日旗が掲げられていたが、さらにそこへ旗がもう一枚揚がった。出撃旗だ。

先頭隊が皆に見送られて次々に離陸を始めて天空へ舞い始めた。そして数分もしないうちに自分の隊の離陸の順番が来た。

滑走路に進入し、スロットルを最大出力まで上げる。

プロペラが高速回転をして機体は高速で滑走路を滑り続け、風を受けて天空へと舞った。

機体を安定させて後ろを振り向くと、今もなお多くの者が軍帽を振って見送り続けていた。

三月はそんな彼らに静かに敬礼すると、一路敵艦隊に向けて出撃した。

そんな三月の特攻出撃など知らない伊吹は、いつものように甲板で青い空を見上げていた。

「三月、今頃どうしてるのかな？」

愛している大切な彼の事を考え、伊吹の表情は自然と笑みを浮かべる。

今頃きつと彼は敵機の中で一騎当千の勢いで敵機を撃滅した上に敵艦に爆弾を落として撃沈しているだろうなあ。と妄想していたので彼は戦闘機乗りなので敵艦を攻撃する事はないという重要な事を忘れていた。

敵機の中を猛然と翔ける三月の零戦。あ、危ないっ！ 後ろからF6Fが狙ってるよっ！ 逃げて逃げてっ！ あああああっ！ 危ない危ない危ないっ！ 機銃があああああっ！ あ、反転！

? うわっ! 後ろを取ったっ! そこだっ! 二〇mm機銃を撃ち込めっ! やったあっ! 撃墜したよっ! さすが三月だよっ! 一つの間にか極限まで妄想が飛躍して三月が真珠湾から生き残っている超一流のエースパイロットのように美化されていた。彼が少しでも優秀な搭乗員だという事は彼女の頭から抜けていた。そんな妄想ワールドに入って愛する人の戦いぶりを妄想していると、天空に飛行機のエンジンが音響き渡った。

音を聞いただけでわかるが、これは零戦のエンジン音だ。エンジン音が響く方向を見ていると、雲の奥から一機の零戦が現れた。

「そっか、今日は菊水一号作戦が発動してたんだっけ」  
きつとあの飛行機も沖縄に向かうのだろう。そう思ったが、一つおかしい事に気づいた。

零戦は南方向から来た。北方の基地から沖縄に行くなら北から来るはず。なのにあの零戦は南から来た。明らかに正反対だ。

すると、零戦は高度を下げて低空飛行に移った。何もかもが本当におかしい零戦だ。しかも零戦は自分の周りを旋回して飛んでいる。「な、何なのあの零戦は?」

伊吹が不思議そうに見詰めていると、零戦から一枚の便箋が落ちて来た。ひらひらとゆっくりと落ちてくる便箋は風に流される事もなく甲板に落ちた。伊吹は不思議そうにそれを拾う。何気なく裏を見て 伊吹は絶句した。

差出人の名前には 三月と書いてあった。

伊吹は急いで空を飛ぶ零戦を見詰める。よく見ると、コックピットからこちらを見ている三月の姿があった。

「三月ッ!? 何で・・・っ!」

「伊吹いいいいいいいいっ!」

風にのって微かに彼の声が聞こえた。

「三月ッ! どうしたの!? 何でこんな所にいるの!? あなた 鹿屋基地に行ったんじゃない」



水平飛行に移った零戦を見詰めていると、翼がクイクイツと動いた。まるで、別れのあいさつのように・・・

「三月ッ!?!」

零戦はどんどん高度を上げて雲に向かう。

「ダメッ! 行かないで! 約束したでしょ!?! 約束守ってよっ!」

伊吹は泣きながら叫ぶが、零戦はどんどん高度を上げる。そして

雲の中に静かに消えた。

エンジン音が聞こえなくなっても、伊吹は彼の名を叫び続けた。

「三月! 三月ッ! 三月いいいいいいっ!」

伊吹はその場に泣き崩れた。

約束したのに、

生きて帰ってくるって、約束したのに、

彼は自分との約束を破って死地へ向かってしまった。

悔しくて、悲しくて、涙が止まらない。

未完成艦である自分には何もできない。自分の無力さが情けなくて悔しかった。

完成していれば、彼と一緒に特攻でも何でもする覚悟なのに、体は決して動く事はない。

涙で顔をグシャグシャにして嗚咽を繰り返す。

手をギュッと握ると、クシャクシャとい音が響いた。

手を開くと、そこにはクシャクシャになった便箋があった。

伊吹はそつと便箋を伸ばし、中を空けた。中には一枚の紙と彼の爪と髪の毛、そして彼がいつも持っていたお守りが入っていた。それらを内ポケットに入れ、伊吹はゆっくりと紙を開いた。それは手紙だった。

震える手で持ちながら読み始めると、再びボロボロと涙が流れた。

「伊吹。いきなりだけど、約束を破ってごめん。」

僕はこれから敵艦に突っ込んで来る。約束を守れなくて、本当に



彼女は叫んだ。

「バカッ！ 三月のバカアアアアアアアアッ！」  
少女の悲痛な声は、佐世保中に響いた・・・

三月は沖縄海域の手前まで来ていた。

武藤に感謝しなければならぬ。

彼が自分に反転して佐世保に向かう事を許してくれたおかげで彼女に会えた。

最後まで笑ってくれる事はなかったけど、それで十分だった。

最後に、彼女に会えただけで、それだけで良かった。

手紙や形見も渡せたし、もう思い残す事は何もなかった。

三月は操縦桿を強く握って海を見詰め続けている。

もう他の特攻機は突撃を終えている時間なので、自分の周りには味方はいないし敵もない。

白い世界に入り、三月はただ一点を見詰め続ける。

そして、しばらくすると視界が開けた。

蒼い空の下、蒼い海を見詰めると 敵機動部隊が見えた。

すでに特攻機が突入した後なので、艦隊の何隻から黒煙が上がっている。

急降下をしようと操縦桿を握り直した時、空の向こうにキラキラと何かが光った 敵機だ！

三月はスロットルを最大出力まで上げて突撃する。

空の向こうから三〇機以上の敵戦闘機 F6Fが現れた。

「たかが一機の零戦相手に大人気ないなあっ！」

三月は操縦桿を一気に倒して急降下する。敵機もそれに続いて急降下して追い掛けて来る。速度でも相手の方が上。ぐんぐん近づき機銃が掃射される。

「くそっ！」

三月は操縦桿を思いっ切り引く。

F6Fにも負けない旋回能力で零戦は上下左右に逃げまくる。

敵機は一斉に機銃の総攻撃を開始するが、三月の零戦は巧みにそれを回避する。

「これでもその辺の戦闘機乗りよりは腕はあるんだよ！」

三月は操縦桿を思いつ切り引いて機体を急上昇させ、ほとんどの敵機を撒く事ができた。残念だが、重い爆弾を積んだ零戦ではこれが限界だ。

残った無数の敵機がしぶとく追い掛けて来る。

三月の零戦は右左に次々に旋回や反転を繰り返して敵機の機銃を避ける。

三月は雲の中に零戦を潜り込ませたが、後ろからF6Fがしつこく追い掛けて来る。

操縦桿を左右に倒して雲の中で敵機から逃げる。雲の中ならある程度は逃げる事はできる。そしてそれは成功。敵機の姿は消えた。

三月は操縦桿を思いつ切り倒した。

すさまじいGを感じながら零戦は垂直に急降下して行く。

白い雲が消えると、そこは蒼い海だった。真下には敵機動部隊がいる。敵機はるか上空にいて慌てて急降下して来るが、もう遅い。後は重力が味方してくれる！

「うおおおおおおおつ！」  
スロットルを全開まで引き上げてすさまじい速度で零戦は急降下する。

敵艦隊も対空砲火を始め、自分の周りに無数に爆発が起きるが、撃ち出された弾丸が戻らぬように、零戦も突き進むのみだった。

狙うなら大型艦。特に空母がいい。見ると、真下には特攻機の攻撃を受けて炎上しているがさほど被害のなさそうな大型空母がいた。「当たれええええええええつ！」

三月は零戦に搭載されている七・七m機銃と二〇m機銃の弾丸を全てを撃ち出した。効果などほとんどないが、それが三月の決意の表れだった。

ぐんぐんと敵機が迫り、もう甲板にいる兵達が見えた。その瞬間、

ガクンツ！と機体が揺れて黒煙と炎を噴出した。命中したらしいが、もうここまで来ればこっちのもの。もう遅い！

迫る敵空母を睨み続けていた三月。だが、フツと笑顔が浮かんだ。そして、そこで目を閉じると、浮かぶの彼女の優しく太陽のように明るく笑顔。

「伊吹 愛してる」

零戦は米正式大型空母の艦橋付近に命中した。

すさまじい爆発は艦橋を吹き飛ばし、堅固な甲板をも打ち砕いて格納庫にまで爆発が回った。格納庫内の航空機や爆弾、魚雷などに次々に誘爆。燃料庫にまで火が回って空母は大爆発を引き起こした。艦体が真っ二つに折れ、全長三〇〇mに近い長さの大型空母は一瞬にして沖繩の海に轟沈した・・・

一九四五年八月十五日、日本は敗戦した。

長く苦しい戦争が、ようやく終わったのだ。

それから一年後の一九四六年十一月二二日、佐世保船舶工業（旧佐世保海軍工廠）第七ドックで空母『伊吹』の解体作業が開始された。

日に日に解体される自分の体を見て、伊吹は小さく笑った。

これで、彼の所に行ける。

「一年半の遅れだけど 三月。今から逝くからね・・・」

日の丸に神風を書かれた鉢巻をし、風で揺れるポニーテールをした伊吹は小さくそうつぶやいた。

天を見上げるとそこには蒼穹の世界が広がり、太陽が永遠の輝きを放ち続けていた。

そんな空を見上げて、伊吹はそっと手をかざした。

「三月、大好きだよ・・・」

空母『伊吹』。一度も海を翔ける事なく解体され、一九四七

艦魂年代史外伝 いつかまた平和な世界で会おうね

年八月一日解体完了

(後書き)

どうでしたでしょうか。

まず言っておきますが特攻機の突入で米正式大型空母（ヨークタウン級かエセックス級？）が沈んだ史実はありません。完全に僕の妄想です。

なんか前回に引き続いて恋愛系が続きますが、まあそれもいいですね。

特攻した乗組員の気持ちがこんなのだったかはわかりませんが、僕だったらこんな感じかな？ と書いてみました。

いやあ、三月と伊吹。こんな純愛している二人は今まで登場した全キャラクターで初かもしません。

こんな作品の後に続くのは一体どれにしようかとストックの中から選んだ作品は、またまた感動ものです。

次の作品は戦後翔輝と隼鷹のお別れの話です。

本編の最後や雲龍型空母の話で出てきた翔輝と隼鷹の物語の完結編です。

史実では戦後すぐに解体された『隼鷹』は、シリーズでは復員船として活躍し、翔輝がその航海長を務めていましたが、その完結作品を投稿したいと思います。

久しぶりの翔輝ものなのですが、どうかご期待ください。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0241d/>

---

艦魂年代史外伝 いつかまた平和な世界で会おうね

2008年8月29日17時02分発行